先駆者たちの背中　第5回

伊勢崎賢治

48歳　紛争解決人

職業は、紛争解決人

文／伊藤詩

2003年2月。伊勢崎賢治は外務省からの依頼により、混乱状態のアフガニスタンにいた。任務は「DDR」（※）と呼ばれる軍事分野の政策調整。いくつも存在する武装勢力の武器を取り押さえ、一つひとつの部隊を解除し、兵士たちの社会復帰を支援することがそのミッションだ。20年以上も内戦を続けてきた国で、武器を手放させることの難しさは計り知れない。そんな中、伊勢崎は武装勢力を束ねる将軍の所に淡々と丸腰で出向き、成功した交渉の最後にこう語る。

「今日はありがとう。ひとこと言わせてもらえるならば、あなたは"男の中の男"です」

映画のような台詞を現実社会で放ちながら、映画さながらの特別任務を行う。彼の肩書は、「紛争解決人」。

唯一無二の肩書を持つ伊勢崎と初めて会ったのは、彼が非常勤講師を勤める大学での休み時間だった。約束の時間からわずかに遅れてきた彼は、「初めまして」と少し恐縮しながら挨拶をした。体格はがっちりとしているが小柄で、意外にも笑顔が愛らしい人だった。

24歳でインドにあるスラム街の住人60万人を束ね市民活動を行い、28歳から10年間アフリカに滞在し、外国人として初めての市議会議員も務めた。その後、東ティモール、シエラレオネ、アフガニスタンといった世界の紛争地帯で「紛争解決人」として武装解除を行う。そんな経歴からか、すごく味のある強面の人物像を勝手に抱いていたのかもしれない。

「学生時代はスター建築家になると思っていました。今は、ジャズバーでトランペットの演奏をするのが夢です」とちょっと照れたように話す芸術家気質の彼からは、紛争地帯で交渉を行う姿は想像つかない。しかし、武装勢力との信頼関係は、ボランティア精神や単純な正義感で築けるはずもない。そこには、圧倒的な信念が必要なはずである。

「伊勢崎さんから、一緒にアフガニスタンに来てくれ"と言われた時、迷いはまったくなかったです」。そう語ってくれたのは、以前所属していたNGOの後輩で、現在は内閣府の研究員として働く今井千尋だ。彼女がそこまで強く信頼するのは、彼の実績によるものではない。「アフガニスタンに行く時、これをお守りに持っていきました」と大事そうに保管していたビニール袋を見せてくれた。中から取り出したのは古びた一通の手紙。彼女がNGOに入社したばかりの頃、ケニアの地に赴任していた伊勢崎にアドバイスを求めて手紙を出したことがある。面識はまったくない。にもかかわらず、自分の経験と考えをびっしりと四枚にもわたって返事を書いてきた。それが10年以上も前になるこの手紙だ。こういう信頼関係は、日々の積み重ねでしかつちかわれない。

「彼の強みは、私みたいな人がいろいろな場所にいることだと思いますよ」と今井が言うように、その姿勢は国内に限らず、国境も越えて伝わっている。伊勢崎がアフガニスタンに赴任していた当時、通訳として行動を共にしていたハシュマットという青年もその一人だ。二人が車に乗ってある山間部に向かっていた時のこと。彼は現地のことを良く知るが故に、そこから先は外国人である伊勢崎には危険だと気遣い引き返そうとした。その時、伊勢崎は意せずこう言った。「ここは君の国なんだから、君らが立て直そうとしなくてどうするんだ」と。

自分が現状復興の主役…。そんな風に考えたことは一度もなかった。それ以来、彼は伊勢崎を慕い、現在は日本に留学に来ている。

人と違う道を求めて枠の外に飛び出す

1957年、伊勢崎は東京都立川市に生まれた。幼い頃に父親を亡くし、母親と二人で歓楽街や競輪場がひしめく米軍基地真っ盛りの立川の木賃アパートで幼少期を過ごす。昼間から注射針を腕にさす者や、毎晩酒に酔いつぶれる夜の女たち。しかし住環境とは裏腹に、必死で毎日を生きる女たちの暮らしの中で、不思議と悪い思い出は残っていない。

中学校に上がると、大好きな映画の影響を受けてブラスバンド部に所属。先生が勝手に応募した全国絵画コンクールで全国一位になったことからも、芸術的感覚が優れていたのは間違いない。その後、高校でも音楽や演劇を含めた文化的活動に励み、卒業後、建築学科に入学した。

「一つの建築物が世の中の思考体系を変えるのだと本気で思っていました」。そう語る伊勢崎の四年間は、誰よりも強い思いを抱いてひたすら勉強する毎日だったが、大学院の研究室に入る直前、彼が慕っていた恩師が病気で他界してしまった。

「あれは本当につらかった。心の中でみんな悶々としながら過ごしていましたね」と学生時代からの友人である村田真は、"当時を振り返ってそう語った。宙ぶらりんの状態のまま時間だけが過ぎ、やがて就職活動の時期が訪れた頃、伊勢崎は突然思いがけない決意を表明する。「おれ、インドに行くことにした」。掲示板に貼られていた"インド政府留学生"の募集を見て、突然応募することに決めたのだ。

「当時は、今からは想像もつかないほど自己主張が強く、自分が正しいと思う価値観でとにかく人と違うことをやろうとしていた。でも彼がすごいのは、今でもずっとその意識を持ち続けていることだと思います」と村田は伊勢崎を評する。枠の外に飛び出したこの瞬間から、唯一無二の人生へと大きく舵がとられ始める。

伊勢崎の移り住んだインドの都市ムンバイは、アジア最大規模のスラムが存在する場所だった。その数約60万人。学校での研究課題は、政府側の立ち退き要求に対して、スラムの人々が排除されないように街の区画を提案すること。しかし、幼少期の木賃アパートでの原体験がそう思わせたのだろうか、「結局、裕福な側から線を引く作業でしかない」と疑問を抱いた彼は、すぐさま大学を中退。スラム街の中に住居を構え、彼らの側から何ができるかを問いかけ始める。いつしか、スラムの住人を束ねて住居権獲得の運動へと導くようになった伊勢崎は、最終的に国外退去命令が出て帰国することになった。

日本に帰国後、「まるで別人みたいに人間が丸くなっていた」と村田が驚愕するほどに変化を遂げた伊勢崎は、その経験によって世界有数のNGOに現地ディレクターとして採用され、アフリカの地で10年もの年月を過ごす。しかしこの時の仕事はまだ、井戸を掘って道を造るなど、あくまで「開発」と言われる分野。紛争解決人へとさらなる変貌を遂げるのは、現地生活の中で芽生えていった、ある強い思いからだった。

「現地の人々と一生懸命作ったシステムや営みを、紛争は一度に"ゼロ"に戻してしまう。それまで関係のないと思っていた、開発"と"紛争"が、コインの表と裏だと痛感したんです」。切なる思いから紛争に関心を抱き研究を始めていた頃、外務省国連政策課を名乗る男性から、ある日一本の電話が入った。

「国連安全保障理事会が今月中に東ティモールでPKOのミッションを創設します。ご興味はございませんか？」。まさに映画さながらの特別任務の依頼。こうして唯一無二の「紛争解決人」としての人生が幕を開け、アフガニスタンの任務へとつながっていった。

＊＊＊

2004年4月。伊勢崎は、アフガニスタンでの一年間の任期を終えようとしていた。彼を待つ学生の元へ戻らなければならない。現地に残るスタッフたちには、こう告げて帰国の途に着いた。

「日本政府に迷惑がかかることを申し訳ないなどと思ってはいけない。そんな小さなことは気にしなくていい。もっと目の前にある、大義"に生きなさい」

現在、伊勢崎は日本の大学で毎週講義を行っている。学生に教える姿を見ていると心なしか嬉しそうだ。時折入る「紛争解決」に向けた調査依頼では、短期で海外に出かけることもある。しかし、大学を辞めて国連や日本の政府に入る道は選ばなかった。幾度の誘いにも、彼が地位や名誉を選ぶことはなかった。教授がいなくなった後の学生の気持ちを彼自身が一番身にしみているからだろうか。20年の時を経て、あの人生の転機を迎えた自分と同じ年齢の学生を前に、伊勢崎は何を感じているのだろう。

実は、二年のインド滞在の予定が四年になったその間、書きためていた卒業論文を発表するため、伊勢崎は日本に一時帰国していた。その時の論文にはこう記されている。

「この論文を書くに当たって、学位取得の為のそのものより、一人でも多くの人に知ってもらいたいと思っています。今日、1985年9月25日より序章を書き始め、来年の2月の論文発表のための一時帰国までに全章をかきあげるつもりです。各章の完成ごとに、そのコピーを研究室ならびに数人の知人に郵送するつもりであります。この論文を手にした方は、私の気持ちをおくみ取りの上、出来るだけ多くの人に回して下さい」

学位のためでなく、現地で目の当たりにした現実を自分の中だけに留めておけないという、彼なりの"大義"だったに違いない。伊勢崎はあの頃からきっと何一つ変わっていない。自分が正しいと信じた価値観で、信じた道を進んでいる。

蛇足になるが、彼はこの"一時帰国の間に、日本とインドという遠距離で愛を育んできた相手と慌ただしく式を挙げ、その足で"二人インドへと戻っていった。大義とは、"人として踏み行うべき最も大切な道"の意味である。

■伊勢崎賢治プロフィール

1957年　東京都生まれ
1984年　インド国立ボンベイ大学
　大学院社会科学前期終了（後期中退）
1986年　早稲田大学大学院理工学研究科都市計画専攻終了
1988年　「プラン・インターナショナル」
　シエラレオネ共和国　岡副所長
1992年　ケニア共和国　現地事務所所長（上記NGO）
1992年　エチオピア共和国　越境事務所所長（上記NGO）
2000年　「国連東ティモール暫定統治機構」　上級民政官知事
2001年　「国連シエラレオネ派遣団」
　国連事務総長副特別代表上級顧問
2003年　2003年：アフガニスタンDDR、日本政府特別代表
　現在は、立教大学大学院の教授として非営利経営と危機管理を教える。
　他、国士舘大学21世紀アジア学部の客員教授

※ Disarmament（武装解除）、Demobilization（部隊解体）、Reintegration（社会復帰支援）